

4 1 伐倒作業の成熟を求めて

岩手県国林造林生産
請負事業協議会
専務理事 山田 徹 治

- 1 手鋸からチェーンソー伐採に変わって30数余年になり、森林施業は、間伐施業主流から非間伐施業へと大きく転換した。

立木の伐倒技術が森林の取扱い変化に応じた変革を成しに遂げてきたのだろうか。皆伐時代の伐倒技術がそのまま非間伐の今に引継がれている気がしてならない。

重大災害の訃報に接するたび、安全、確実な伐倒作業は私達の手の届かないところにあるのだろうか、という焦燥感にかられる。

- 2 良い伐倒とは、安全、確実に目的地へ切り倒すことである。

狙ったところへ安全、確実に伐倒するため、4つの提案をする。

- (1) ある範囲を暗示させる「伐倒方向」の呼称を改め、伐倒木を着地させる「伐倒地点」に名称を転換称を転換させることです。

「伐倒方向」の呼称は、向き、方角といった、“ある範囲“でとらえられており、伐採現場においても漠としたとらえ方になっている。

このような面的なとらまえ方を改め伐倒目的地を明確にする必要があります。

伐倒にあたって、伐倒木の先端を着地させる「伐倒地点」ともいうべき「点」のとらえ方に厳しい転換をしたい。

- (2) 伐倒方向の安全確認は、伐倒者が伐倒木を背にして行っていますが、逆方向から伐倒木、障害物を観察する安全確認を行うべきではないだろうか。

伐倒者は伐倒方向へ歩いて行って、樹高と略同距離付近から、伐倒木の梢のかえり具合、風の方向を観察することです。勿論、他の作業者がいないか、地上に障害物がないかどうか等を総合的に判断し、問題がなければ、伐倒木の着地点を決め、目印に簡単な標識をたてる。この標識の位置が「伐倒地点」として重要、絶対的な意味を持つことになる。伐倒地点から伐倒木へ歩いてもどるとき安全の再確認を行い「歩行目確認」の効果をかかめるようにすることが大切である。

- (3) 受け口を、オチョボ口から、ラツパ口へしよう。ということである。

受け口の下切りは水平に行っていますが、これを若干上向きにして受け口を広げる受け口作りに転換したい受け口の広さは、木が倒れる間できだけ長く保つよう大きく作る必要がある。もし、受け口の広さが狭いと木が倒れ始めて直ぐ間隔が

なくなり、倒す案内人としての役目がなくなる。伐倒木が半分も倒れないうちに「つる」が壊れてしまうので、50度から55度程度のラップ口を作りたい。

- (4) 受け口は伐倒方向へ作っているが、非常にあいまいな作り方ではないだろうか。伐倒地点である目印標識に対し直角切りする受け口作りへ転換を図るべきである。直角切りをするためには、受け口上方斜め切りを正確に行うことです。感覚的な判断を改め、チェーンソーの前ハンドルを伐倒地点と正確に平行にして切り込みを入れることである。下切りを受け口作りは終が、ここで、受け口が伐倒地点に対し直角であるか、必ず確認が必要です。直角でない場合は手直しをして正確を期します。

直角確認は、時間も特別な用具も必要としない。一枚の紙で三角型を作り受け口へあてるだけである。一枚の小さな紙きれが、安全確実な伐倒を支えるのである。

- 3 岩手県請負協は、昨秋、伐倒研究会を開催した。伐倒木を安全確実に目的地に倒すためには、提案の項目を実行に移すことである、ことを研修会で確認したことを報告します。